

EXPO2025 大阪・関西万博参加プログラム

日本の世界自然遺産5地域に暮らす
子ども作文コンクール

テーマ

世界自然遺産と
私たち

みつけた！自然のふしぎ・自然と暮らすたのしみ

地域代表
市町村代表
最優秀作品集

発表

日時：令和7年6月5日（木）11時～12時

会場：大阪・関西万博 EXPO ホール「シャインハット」

主催：世界自然遺産5地域会議

共催：イベント学会、一般財団法人地球産業文化研究所

後援：環境省、林野庁

制作：

世界自然遺産5地域会議「子ども作文コンクール」選考委員会

世界自然遺産 5 地域会議「子ども作文コンクール」 入選作品集

目次

一．選考委員紹介と全体選評・・・・・・・・・・・・・ 1

【中学生の部】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

知床地域

委員長 山極 壽一

羅臼町

知床未来中学校一年加瀬楓花

委員 岡部 史

白神山地域

委員 川上 和人

藤里町

義務教育学校藤里学園八年

三谷たくみ

二．地域代表（最優秀賞）作品

小笠原諸島地域

【小学生の部】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

知床地域

羅臼小学校四年

石田 栞椰

白神山地域

舞戸小学校五年

加藤 大咲

鯺ヶ沢町

母島小学校四年

門脇 伊織

小笠原諸島地域

小笠原村

伊織

屋久島地域

安房小学校三年

金田 航朔

奄美大島、徳之島、
徳之島町

沖縄島北部及び西表島地域
徳之島町 亀徳小学校二年 中尾茉莉乃

屋久島地域

屋久島町

中央中学校二年 柴 高志郎

奄美大島、徳之島、
瀬戸内町

沖縄島北部及び西表島地域
古仁屋中学校一年脇田 勇波

三. 市町村代表 作品

【小学生の部】・・・・・・・・・・・・・・・・29

知床地域

斜里町 朝日小学校 三年 佐藤 糸

白神山地地域

藤里町 義務教育学校藤里学園 三年

深浦町 深浦小学校 四年 阪崎 岳彪

西目屋村 西目屋小学校五年 三浦 樟己

弘前市 岩木小学校 五年 山崎 壱歩

八峰町 八森小学校 六年 小林 青羽

能代市 二ツ井小学校六年 成田 一真

奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島地域

宇検村 田検小学校 六年 久保 聡祐

瀬戸内町 阿木名小学校四年 坂口 輝都

龍郷町 赤徳小学校 二年 四位 悠眞

天城町 天城小学校 三年 吉岡 瑛美

東村 有銘小学校 五年 田中なつめ

【中学生の部】・・・・・・・・・・・・43

知床地域

斜里町 斜里中学校 二年 高橋 結衣

白神山地地域

鱒ヶ沢町 鱒ヶ沢中学校二年 柳 遥香

八峰町 八峰中学校 三年 小林 莉桜

能代市 能代南中学校一年 畠山 璃紗

奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島地域

宇検村 名柄中学校 二年 内田 翔己

龍郷町 龍南中学校 二年 崎田 乃愛

徳之島町 亀津中学校 一年 下窪 友彩

天城町 北中学校 三年 高 陽奏

東村 東中学校 二年 北島天人丸

参考 子ども作文コンクール 概要・・・・・・・・53

※学年は、応募当時（二〇二五年二月）のものです。

※地域代表作品は市町村代表作品でもあることから、ここ

では市町村代表としての掲載は省略しています。

※市町村代表中学生部門の弘前市代表作品作者は、作品集

への掲載を辞退されたため、掲載していません。

※作品はできるかぎり原文のまま掲載しました。

一．選考委員紹介と全体選評



選考委員長 山極 壽一（やまぎわ じゅいち）

総合地球環境学研究所所長
京都大学名誉教授

一九三二年に発令された国立公園法や一九五七年の自然公園法は、優れた自然の風景地を保護するとともに、その利用を増進することを目的としていました。そこに一九九三年から二〇二一年にかけて5つの世界自然遺産地域が登録され、生態系と生物多様性の保全という目的が加わることになりました。5つの地域はいずれも大都市から離れており、日本列島の自然を特徴づける要素がたくさん盛り込まれています。

今回応募してくれた小学生、中学生の作文には、その自然の特徴が見事に生かされています。しかも、それらを自分の目で眺め、自然の不思議な造形や営みに気づき、自分の生きる力に変えたり、世界の人々に伝えたいという気持ちがあふれていて、読んでいてわくわくするような思いを覚えました。

小学生の作文は生き物と触れ合った体験が驚きを込めて記されており、中学生の作品にはその喜びをどう世界に伝え、未来に残していくかという希望が述べられています。

日本の子どもたちにとって、このような成長過程で素晴らしい自然体験をすることの重要性を改めて感じました。これらの貴重な自然を育むそれぞれの地域の文化の大切さも、子どもたちはしっかりと学び、世界へ広げてくれるものと期待しています。



選考委員 岡部 史（おかべ ふみ）

児童文学作家

翻訳家 歌人（塔短歌会所属）

自然という豊かな闇

「世界自然遺産」という大自然に住み、日常的に自然と接しながら暮らす小中学生の作文は、いずれも生き生きとしていて楽しいものでした。特に感動させられたのは、単なるワシではなくオジロワシ、イモリではなくシリケンイモリ、カエルではなくモリアオガエルなどと、特定できる鋭い観察眼でした。

私も少女期は雪深い東北の町に住んでいたので野生動物が身近にいたはずですが、昼も暗い森や沼辺が怖くて、なかなか近づけなかったことを思い出します。皆さんの作文に触れて、子供の頃は怖かった闇も、多様な生き物を育む、豊かな闇だったのだと気が付きました。惜しいことをしたと今は思います。

このコンクールへの応募を機会に、身近な動物、昆虫、あるいは植物や微生物、気象など、自然の中で目にするいずれかについて、できればあまり他の人が目にとめないような一つのことに関心を持ち、文章に書きとめていつてほしい、と思います。

欧米には自然の中で暮し、その経験を生かして大作家になった人が多いのです。皆さんの中から「大草原の小さな家」シリーズや、『アルプスの少女』のような文学作品を手掛ける人が現れるかもしれません。



選考委員 川上 和人（かわかみ かずと）

森林総合研究所北海道支所地域研究監

鳥類学者

NHKラジオ子ども科学電話相談回答者

まず、作文はどれもびつくりするほど上手でした。私が子供の頃はもっと下手くそだったので、丁寧に書いてくれていて嬉しかったです。

小学生部門ではどの作品にも自分の体験が描かれていて、自然の様子が目に浮かんできました。特に印象に残ったのは、徳之島の中尾茉莉乃さんの「白ありがとぶ夜は」でした。シロアリの乱舞を経験して、生物のつながりについて気づいたことが書かれています。私のようにシロアリは迷惑という先入観にとらわれることなく、それもまた自然の一部だと教えてくれました。

中学生の作品は経験に考察を重ね、広い世界の中での地域の価値や課題を伝えてくれています。こちらでは斜里町の高橋結衣さんの「私の大切なモノ」が印象的でした。知床の身近な自然の魅力や厳しさとともに、路上ゴミのようなネガティブな要素を怒りとともに紹介しています。そこからはストレートなメッセージの持つ力を感じました。

私は生態系の保全に関わっており、課題の多さに悩むこともあります。しかし、その自然を引き継ぎ、守り、さらに未来につなげてくれる次世代がいることに勇気づけられました。

そんな思いを伝えてくれて、みんなありがとう！

二. 地域代表（最優秀賞）作品

【小学生の部】

知床地域代表 「私の町の海」

羅臼町立羅臼小学校 四年 石田 栞椰

私の住んでいる羅臼町では、一年を通して海のいろんな景色を見ることができます。

まず春と夏の海では、クジラやシャチ、イルカなどの生き物を見ることができます。私の家の窓からも羅臼の海を気持ち良さそうに泳ぐクジラの潮吹きや大きなシッポが見えます。羅臼の海はクジラにとって、とても住みごこちのいい海なんだと感じると同時に、そんな海の目の前に住んでいることが私のじまんです。日本中どこを探しても、こんな場所はないと思います。そして羅臼の夏といえば羅臼昆布漁を忘れてはいけません。私のおばあちゃんも昆布漁のお手伝いをしていて、作業場にいった事があります。海岸沿いにある昆布作業場では羅臼昆布の匂いが充満していて、夏の暑さと潮の香り、そして羅臼昆布の匂いで羅臼の夏を感じることができます。この羅臼昆布を育てている海は私にとっても、私の町にとっても、なくてはならないものだと感じました。

次に秋の海には、秋鮭の姿を見ることができます。食べたらずつ品で、私も大好きです。この秋鮭を求めて釣り人も多く羅臼にきます。なので秋になると釣り船や釣り人で海はにぎわっています。でもそんな秋鮭ですが、年々とれる量がへっています。秋鮭は約四年かけて世界中を周っています。海水温度の上昇によって羅臼に戻ってくる秋鮭がへっているからです。いつまでも秋鮭の戻ってきたくなる海やにぎやかな羅臼の海を守ってみたいです。

そして冬の海です。冬の海はなんといっても流水が見どころです。大きな流水から小さな流水まで、海一面ぎつしり流水でいっぱいになります。流水一つひとつ大きさや形はちがっています。この流水たちはロシアから流れてきます。ロシアから羅臼、そして私の住む家の前まで流れてくると思うと、世界を感じることができます。また流水だけでなく、流水につられるようにオオワシ、オジロワシがやって来て、とても身近

に見ることができます。これらの鳥たちは冬が終わるころには帰ってしまいます。これらの景色は冬の間だけの特別な時で、私は毎年冬が一番楽しみです。

最後に、一年を通して羅臼の海はとてすてきな景色を見せてくれます。この景色はどれも特別で羅臼で見えない景色です。だから私は、この景色のことや、羅臼のことをいろんな人に知ってもらいたいし、見せたいです。そんな海の景色を守っていくために、私でも出来る海岸のゴミ拾いやゴミの量をへらす、物を大切に使うことをしていきたいです。私の町のすてきな海の景色をぜひ見に来てください。



「カメムシすんでな、今年の冬だば雪のれふるべな。」秋に大量発生したカメムシを見て、大人たちが言っていた通り、今年の冬は大雪になりました。こんなに雪が多い冬は生まれて初めてで、大きな雪だるまを作ったり、高く積んだまきの上からバク宙ダイブしたり、雪山をほって基地も作りました。雪遊びした後は、まきストープにあたりながら、おばあちゃんがむいてくれたりんごを食べました。あったかい部屋でしゃっこいりんごを食べて、暑い夏に、まき割りの手伝いをがんばってよかったなうと思いました。

春になると、雪が溶けて外で野球ができるようになります。土や花のいいにおいがして、春の外は気持ちがいいです。おじいちゃんや山に木を切りに行くので、ついて行きます。雪が溶けた山の道には、たくさん穴が開いています。弟と一緒に、穴の主が、ねずみかへびかモグラか、ほって調べます。だけど、いつもとちゅうで道を見失って、巣穴までたどり着けません。

小さい体でほっていて、すごいなあと思います。

夏になると、川や海に行きます。川では大きいモクズガニをとります。食べるわけではないから、家族に見せたら逃がしてあげます。海では釣りをします。海が好きなおばあちゃんが、連れて行ってくれます。釣った魚は、煮たり焼いたり、刺身にしたりして、お父さんが料理してくれます。家族はおいしいと言って食べてくれるので、うれしいです。でも、お父さんが釣ってくるイカのほうがよろこばれるので、ちよつと悔しいです。

秋はとても忙しい時期です。僕は家でアオダイショウを飼っています。名前はアオです。アオはカエルしか食べないので、たくさんつかまえておかないといけません。集めたカエルを冷凍したいけど、お母さんが許してくれないので、カエルのエサになる小さい虫も探さないといけなくて、本当に忙しいです。

そしてまた冬が来ます。来年の冬は何して遊ぼうか

な。雪の量は、秋のカメムシの量をチェックしなくちやな。その前にカエルも探さなくちゃいけないしな。考えることがたくさんあって、毎年わくわくします。僕のお兄ちゃんは、野球をするために家を出て、県外に暮らしています。鱈ヶ沢町と違って、雪が積もりません。山と川はあるけど、海がないところですよ。この作文を書いていたら、もしかしたら、自然がたぶんあるところで生きている僕は、幸せなのかもしれないと思いました。当たり前前に季節が変わっていくことや、きれいな空気の中で野球ができることも、大好きな生き物を見たり触ったりできることも、当たり前ではないのかもしれない。大人になったら、どこに暮らすのかわからないけど鱈ヶ沢町の自然が、ずっとあればいいなと思います。



小笠原諸島地域 代表 「自然の宝箱」

小笠原村立母島小学校 四年 門脇 伊織

僕は小笠原諸島の母島に住んでいます。人口約四百五十人、本土から二十六時間かかる小さな島です。本土の親せきや友達から、

「何もなくて毎日つまらなくない？」

と聞かれる事があります。しかし、小笠原には宝物があるのです。

小笠原は海洋島といって、海底の火山ふん火でできた島なので、生物が他の陸地から渡って来る事が難しい島です。なので、母島にしか無い自然がたくさんあります。例えば、小笠原セセリという蝶です。セセリは人が持ち込んだ外来種のトカゲに食べられて絶滅つしかけている事を知って悲しい気持ちになりました。だから授業でセセリを育てると聞いた時は固有種をうまく育てられるか不安な気持ちになりました。無事に生まれてきますようにと願いを込めて、卵を観察しました。何日もたつてセセリが生まれた時は本当にうれしかったです。セセリの幼虫は顔にM字があったので

マックと名付けました。マックは葉っぱをたくさん食べて元気に育ちました。立派な成虫になったので、校庭で放蝶するとマックは勢いよく飛んで行きすぐ見えなくなりました。マックが自然に帰る姿を見てさみしい気持ちになりましたが、僕達が育てたセセリが子供を産んで少しずつ数が増えると思うとほこらしい気持ちになりました。

そんな母島の自然には、他にもおどろくような発見があります。

山に登ると、オガサワラオカモノアラガイを見つけることがあります。このカタツムリは、母島の気候に合わせてカラが退化した透明なゼリーのような見た目をしています。タコノ木の葉っぱをそつとのぞくと、ビックリして葉っぱの奥に逃げていきます。

「家にいる時に突然屋根をはがされたような感じかな」

とお母さんが笑って言いました。その時、体の大きさ

も、住んでいる家もちがうけど、僕もオカモノアラガイも同じ母島の自然の中で一緒に生きているのだと気付きました。

毎日何気なく見ている鳥や虫や花も、絶めつしたら二度と戻ってきません。僕達を守らなければならない宝物です。そして小笠原は宝物がたくさん詰まった宝箱みたいだなと思います。

母島は中学校までしか無いので後何年かしたら僕は島を出て行きます。島を出たら、生まれた時からすごした小笠原の魅力をたくさんの人に伝えたいです。そしていつか島に帰って来た時に、僕の大好きな母島の自然が残っているとうれしいです。また、数の減ってしまった鳥や虫たちも増えているといいなと思います。そして、今の赤ちゃんが大人になった時も、その先も人間と自然と一緒に暮らしている宝箱のようなこの島の景色が続いていくことを願っています。



「世界しぜんいさんつていうのは、世界の宝ということなんだよ。」

ガイドをしている友だちのお父さんが教えてくれました。

ぼくの住んでいる屋久島は、世界の宝の島です。好きなどころがたくさんあります。学校からは大きな山が見えます。ぼくは、その山を見ると、どうどうとしていて、かっこいいなと思います。

たねが島のロケットの打ち上げがあると、みんなで校庭のすべり台の上から見ます。ロケットの炎の光まで見えて、すごきれいです。

ぼくの家から海までは、歩いて百八十歩です。ぼくはときどき、海岸で石拾いをします。カメのこうらみたいにヒビが入った石を見つけて、げんかんにかざるのが楽しいです。

夏になると、家のまわりで小さなエビをとることができます。ぼくは、弟とエビとりきょうそうをして遊

びます。二人合わせて、百ぴきくらいとったこともあります。

それから、屋久島のすなはまには、ウミガメがたまごをうみにやってきます。ぼくは、二年生の夏、アカウミガメのさんらんを見ました。その時、ウミガメが一生けん命にたまごをうめるすがたに感動しました。たまごを、ネコやカラスやタヌキから守るために、たくさんすなをかけていました。ぼくは、ウミガメのために何かしたいと思いました。

屋久島には、ウミガメのかわいい赤ちゃんが、ぶじに海に帰れるようにお手つだいをしている人がいます。夏だけでなく、一年中カメを守っています。

ぼくも、永田はまに松の木を植える活動にさんかしました。松の木は、台風の強い風からすなはまを守る大切な役わりをしているそうです。

「これで、ウミガメもよろこんですなはまに上がってこれます。」と言ってもらった時、とてもうれしかった

です。

ぼくがこの島で一番気に入っているのは、屋久杉です。なぜかというと、屋久杉のにおいは、こうばしくて心がとてもおちつくからです。お父さんが屋久杉のお店をしているので、いつも屋久杉を見たりさわったりしています。屋久杉は、屋久島にしかないとても貴重な宝物です。

ぼくのまわりには、すぐ近くに、山や川や海があって、楽しいことがたくさんできます。ぼくは、屋久島が大好きです。ヤクシカやヤクザルもなかよくくらしています。きっとこの島が大好きなんだと思います。

今、屋久島には、たくさんの方が来てくれます。遠い外国から来る人も、たくさんいます。きっとその人たちも、屋久島が大好きになっていると思います。屋久島は、人や動物、みんなの宝物です。



奄美大島、徳之島、
沖縄島北部及び西表島地域

代表 「白ありがとぶ夜は」 徳之島町立亀徳小学校 二年 中尾 茉莉乃

「今日は、おもしろい日かもしれない。早くじゅんびして行くよ。」

お父さんが、お母さんとわたしをせかすように大声で言いました。五月のむしむした風がふく夜、はねをつけた白ありが、げんかんの明かりにむかってとんできました。わたしは、すぐに「あの日だ」と思いました。

とくの島ではつゆのころ、たくさん白ありがはねをつけ、いっせいにとびまわる日があります。言いつたえでは、「三回白ありがとぶとつゆがあける」と言われています。はじめ、虫がきらいなわたしは、白ありをこわがっていました。でも、ある時お父さんが、「つかまえて、ヤモリに食べさせてみよう。」と言い、虫とりあみをわたしにきました。ひっしにつかまえて白ありをヤモリにあげるとパクパクと食べました。「なんか回てんずしを食べている人みたいだ」とおもしろくな

り、白ありが顔やふくの中に入ってくるのもわすれて、あみをふり回しつづけました。わたしの家ではこればかり前になりました。

お父さんの車で山の中を走りました。アマミノクロウサギを見るためです。お父さんはあらしのようにとんでくる白ありのむれをワイパーでかき分けながら気をつけてすすみます。そして、白ありだけでなく、白ありを食べるトカゲやヤモリも、それを食べる鳥やヘビたちもそのまわりにすむ生きものたちもこの日、活発にうごき回るという自分の考えを話しました。わたしは、アマミノクロウサギが出るのかなとワクワクしましたが「そんなことが本当にあるのかなあ」と思いました。

野原につきました。暗やみの中をじつと見ました。黒い丸いものがうごいています。草を食べるアマミノクロウサギです。その近くにも見えました。わたしは、

うれしくて大きな声を出しそうになりましたが、あわてて口をとじました。あっちにもこっちにも出てきました。少しの時間で十五ひきも見ていました。さらにお父さんの後をついていくと小さな水たまりにつきました。そこには、二ひきのガラスヒバアが黒い体をくねらせて水の上でダンスをおどっていました。お父さんは、さらにはやく歩きました。暗くておぼけが出そうな林の中でした。お父さんが、にこにこしながら、「いたいた。見て、やつぱりいた。」

とゆびさした先には、オレンジのしまもようがきれいなオビトカゲモドキがかわいくポーズをきめています。あっちにもこっちにも。わたしは、お父さんの話を思い出し、「白ありがとぶ日には、生きものたちがワクワクするおまつりがひらかれているんだ」と思いました。食べるものも食べられるものもいるけれど、このおまつりが何回もひらかれてずっとずっとつづいてきて、今の自ぜんがあるんだなと思いました。いつの間にか白ありはきえ、いつものしずかな夜になっていました。



二. 地域代表（最優秀賞）作品

【中学生の部】

北海道東部にある知床羅臼。オホーツクの海に囲まれ、目の前には日本固有の領土、国後島があります。私の住むトコ、羅臼町は陸域にも海域にも希少な野生動植物が多く、漁業が盛んで年中豊富な海の幸が水揚げされる人口四千二百人ほどの町です。私が郷土を誇りに思うことを三つ紹介します。

まず一つ目はなんといってもオホーツクの海です。植物プランクトンの生育に必要な鉄分を含み、栄養が豊富で魚類や鯨類などの生き物が多く、観光船では高い確率でシャチやクジラが見られます。また、冬になるとユーラシア大陸から流れてくる流氷の下で、クリオネやアザラシ、絶滅危惧種のトドが見えます。毎年多くの観光客が知床の生き物を見るために世界中から訪れます。

二つ目は今年で四十回目を迎えた郷土イベントで自分達が暮らす町の自然について改めて学ぶことができる、ふるさと少年探険隊です。町内の小中学生が知床

岬を目指し、崖や狭い道を越えて五泊六日の野外活動に参加します。知床探険隊では、朝日や満天の星空が見え、天候が良ければ国後島がはっきりと見えます。ヒグマやエゾシカにも会え、知床の自然を身をもって学ぶことができます。

三つ目は絶滅危惧種や国指定の天然記念物が数多く生息していることです。例えば、オオワシや、オジロワシ、シマフクロウが挙げられます。オオワシは国内最大級のワシで、翼を広げると約二メートルになります。シマフクロウはアイヌ語ではコタンコロカムイといい、北海道の先住民である、アイヌ民族が「村を守る神」としてあがめてきました。その他にもシレットコスミレなどの高山植物、二十年前にラウスカジカという新種の魚が発見されました。このような類いまれな動植物と私たちは共存しています。

そんな私が誇りに思う郷土、知床は二〇〇五年に世界自然遺産に登録されました。その理由は、流氷がも

たらず豊かな海洋生態系と陸上の原始性の高い生態系が相互に作用していることが評価されたからです。その他にもシマフクロウやシレットコスミレなどの世界的に希少価値の高い動植物が生息できる環境が残っていることも登録の決め手となりました。

私はこの町で十三年暮らしてきて、人口は減ってきているけれども、羅臼の空で鳴く鳥の声や季節で変わる匂いは変わっていません。夏、早朝に「クエークエー」と鳴くオオセグロカモメの声、羅臼昆布を干す浜の匂いが私は大好きです。魚の城下町、海の幸が美味しい町、世界自然遺産の町。

ここが私の住むトコ知トコ羅臼。



「四百年ブナが倒れた。」

三年前、白神山地のシンボルである四百年ブナが倒れた。当時小学六年生だった私は、総合的な学習の時間に岳岱自然観察教育林の四百年ブナに会いに行つた時のことを思い出した。太く、どっしりと、白神山地の主であるかのような威厳さえ感じさせる姿だった。ニースでは、四百年ブナを倒れたままにすること、次の命につなげたいと話していた。倒れた木をそのままにしておくことが、なぜ次の命につながるのだろうか。これが私が白神山地を調べてみようと思ったきっかけだった。

その年の夏、倒れた四百年ブナを見た。根元から折れるように倒れていて、その根元は完全に腐っていた。そんな状態で幹を支え、立っているのが精一杯だったところに大雪が降って、ついに力尽きてしまったのだ。悲しく残念な思いと同時にその長い年月、白神山地に生き続け、いつの頃からか人間と触れ合ってきたこの

巨木に「ありがとう。お疲れ様。」と伝えた。

巨木が倒れたことで、ぼつかりと空間が開いて青空からは太陽の光が差し込んでいた。そうか、これが本で読んだ「林冠ギャップ」だ。今まで遮られていた陽光が、巨木が倒れたことによって周りの木々や草花にたつぷり降り注ぎ、太く大きく生長していくのだ。

この周りの若い木々は四百年ブナとは兄弟で、この先この弟たちが第二第三の四百年ブナになっていく。ブナの世代交代だ。

白神山地世界遺産センターで「腐葉土」という言葉を知った。ブナが作った水分を地面に落ちた葉っぱがたつぷり吸って土に溶け込んで栄養を蓄えた腐葉土となる。一年に一ミリの厚さの土が作られ、一メートルの土だと千年分の腐葉土が積もったということになる。ガイドさんが、腐葉土は落ち葉がミルフィーユのように分厚く重なっていると話していた。以前歩いたブナ林がふかふかしてとてもやわらかかったこと

を思い出した。

倒れた四百年ブナは時間をかけて土にかえり、腐葉土と一緒に栄養たつぷりの土になる。そこから新しい芽、つまり四百年ブナの赤ちゃんが生まれ、周りにいる四百年ブナの弟たちと共に育っていく。倒れたままにすることで、次の命につなげていきたいとはこのことだったのだ。倒れた四百年ブナはずっと生き続け、つながる命が森を作っていく。それは森の命の循環を促すことになるのだと知った。白神山地が八千年もの間繰り返してきた、森の命のバトンタッチに立ち会えた思いになって、私は胸が熱くなった。この白神山地の麓に生まれたことに感謝と誇りをもって、この命の山を守っていくために私に何ができるかを考えてみようと思う。

私も守り継ぐ挑戦者の一人なのだから。



小笠原諸島地域 代表 「母島の海」

小笠原村立母島中学校 二年 築館 蒼天

母島は、東京から約千キロメートル南に離れた島です。母島は暖かく、一年中半袖でも過ごすことができます。そんな母島では海が身近にあり、一年中イベントがあります。一月の海開きから始まり、ホエールウォッチングやカヌー大会などが有名です。また、シュノーケリングや浮島遊びなどもできます。学校でも海の行事がたくさんあり、その中で僕が一番印象に残っている思い出は校外学習での平島の活動です。小学校の時のこの体験は、今でも僕の心に残っています。

平島とは地形がとても平らな無人島で、有人島ではあまり見られない、オガサワラセセリやオガサワラカワラヒワなどの小笠原固有の生き物を多く見ることがができます。校外学習では、まず船で平島の近くに行き、ミニボートで上陸しました。上陸後に、外来種のパイヤの木を抜きました。パイヤは固有種の栄養分を吸い取ってしまうため、固有種の保全を行うためにこの活動を行っています。その後、とても珍しく、滅多

に見ることができないオガサワラセセリを探しました。残念ながらオガサワラセセリを見つけることはできませんでしたが、食事の跡などの生きている証を見つめることができました。

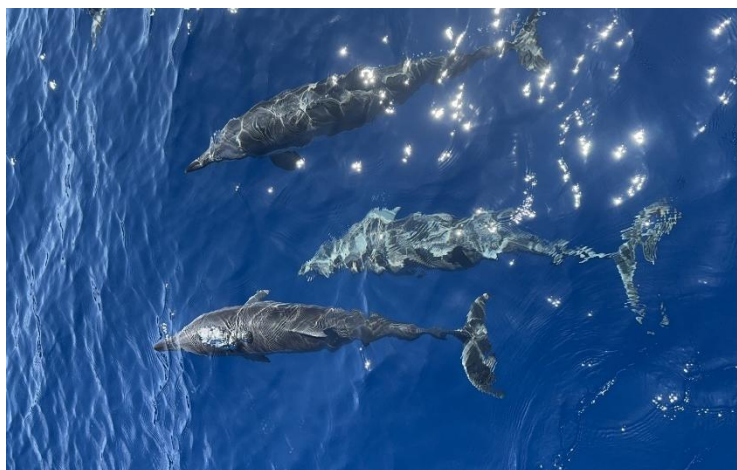
そしていよいよ海での活動が始まります。平島近海では珊瑚や熱帯魚などの海の生き物を見ることがができます。この時も水中からアカエイ、ユウゼン、オジサンなどの多くの魚を見ることができました。また、友達と泳いでいる時には、絶滅危惧種のアオウミガメも見ることができました。帰りの船上からはイルカの群れを友達と一緒にみて、歓声を上げました。この小笠原の豊かな海を感じることができた経験として、今でも記憶に残っています。

その一方で、岸にあるゴミをたくさん見ました。こんなにきれいな海にもゴミがある事実を知りました。それと同時に、僕はこの海を守りたいと強く思いました。そのために日頃からゴミを分別したり、エコパツ

グを使ってゴミを出さない工夫をしたりしています。

また、学校行事での海岸清掃に参加し、きれいな海を守る活動にも取り組んでいます。

僕は平島での体験と、これまでの活動を通して、小笠原のすばらしい景色を守るために自分が小笠原の魅力を発信していきたいと思いました。多くの人々に小笠原の海や自然の魅力を知ってもらいたいです。そのため僕は、内地の高校に進学した時に、これまで学び、体験した母島の魅力を友達に紹介します。そして大人になったら、SNSなどを活用し母島の魅力を世界に発信していきたいです。



屋久島地域 代表 「屋久島の自然」

屋久島町立中央中学校 二年 柴 高志郎

僕は、五歳から屋久島にいる。僕は、多くの魅力があるこの屋久島が大好きだ。

まずは海。海にはたくさんの生き物がいる。その中でも、屋久島ではウミガメが有名だ。僕は屋久島に来てから、毎年ウミガメの産卵の時期を楽しみにしている。卵を産むウミガメはとても幸せそうに泣いている。ずっとそう思っていたが、ウミガメが産卵するとき泣いているのは、目が乾燥しないようにするためらしい。ちなみに、地元の人は、生まれた子ガメに砂を投げる。それを見て驚いたが、子ガメに砂を覚えさせて三十年後に帰ってくるようにするためなのだそうだ。

浜に登り、穴を掘って卵を産み、穴を埋めて帰っていく。これをするのにウミガメは一時間以上かかることもある。一生懸命卵を産むために力を尽くすウミガメはカッコいい。

次は山だ。山にもたくさんの魅力がある。白谷雲水峡からはさまざまな山に登ることができる。九州で一

番高い宮之浦岳や樹齢が七千年以上といわれている縄文杉などにも登ることができる。僕は、太鼓岩に何度も登ったことがある。しかし、なぜか毎回見る景色が違うのだ。最初に登ったのは年中のころ。その時はまだ体も小さくて自分が登るので精一杯だったが、年を重ねるにつれて自分に余裕ができ、周りの景色を観察するようになった。だから、景色が違うように見えるのだと思う。しかし、変わらないこともある。それは、頂上に着いたときの気持ちだ。快晴でも曇りがかかっていても、達成感でいっぱいになる。

そして、屋久島には滝もある。屋久島の大川の滝は日本の滝百選にも登録されている。大川の滝は、落差八十八メートルにもなり遠くからみても十分大きい。近くに寄ると水しぶきが飛んできて大迫力だ。屋久島の滝と言えば大川の滝だけではない。千尋の滝と呼ばれるものもある。この滝も落差六十メートルで大きな滝だ。滝も魅力的だが、水が流れ落ちているV字型の

大きな花崗岩も魅力的だ。言葉では表せない不思議な色や形をしている。

屋久島には杉がある。屋久杉ランドというところがあるが、標高約千メートルに広がる自然休養林だ。ここは、登山初心者向けの遊歩道が整備されている。五つの散策コースがあり、千年杉やくぐり杉などの特徴的な杉をなんと間近で見ることができる。僕の初めての登山は千年杉に行った時だ。そこらに生えている木なんて比べ物にならないくらい大きくて感動したのを今でも覚えている。

僕はもつと屋久島をいろいろな人に知ってほしい。そして誰もが屋久島の自然を守りたいと思えるようになってほしい。そのためには屋久島に住んでいる僕たちが自然をきれいにしてもつと魅力的な屋久島にしていきたい。なぜなら僕は屋久島の自然が大好きだからだ。



奄美大島、徳之島、
沖縄島北部及び西表島地域

代表 「ここが僕の居場所」 瀬戸内町立古仁屋中学校 一年 脇田 勇波

「あゝ。今日も気持ち良いなあ。」

僕は自転車に乗る事が好きで、移動手段としてももちろんだが、部活動で思うようにできず悔しい時、友達とうまくいかず気持ちが落ち込んでいる時、気持ちを切り替えるためにも自転車に乗る。自転車に乗っていると気持ちの良い風が吹く。昨日は冷たく元気がない風、今日は僕を連れて行ってくれる風。毎日違う風が吹き、僕の気持ちに合わせているようで風と僕の心は会話しているような気持ちになるのだ。また走っていると見えてくる景色は目の前のターコイズブルーの浅瀬から遠くには強く逞しい濃い青色の海。そしていつもそばで寄り添ってくれる緑広がる山々。風とともに僕の背中を押してくれる壮大に広がる自然の景色がやっぱり僕は大好きだ。

その景色ももちろんだが僕の町は格別だ。それは走っている時にすれ違う人達が必ず声を掛けてくれる事

だ。僕の住む町は会う人会う人が「ゆうは、どこに〜？」や「気をつけて走れよ！」そして皆、笑顔で手を振ってくれるからいつの間にか心が晴れてしまうのだ。

壮大な景色とともに温かい人がいて、その全てに僕は育ててもらっているのだと感じる。

僕が通い続けた小学校の中にも見守っていてくれた自然がある。校庭にどっしりと根をはっているガジュマルの木だ。昼休みにドロケイをする時の大切な皆の陣地場所が、このガジュマルの木だ。触れたり、時には隠してもらったり、雨からだって守ってもらったガジュマルの木は僕にとってお父さんみたいな存在だった。やっぱり僕のそばにはいつも自然があるのだ。自然も、そのそばで暮らしている人も、どちらも温かくて気持ちの良い存在だと僕は日々教えてもらっている気がする。

この自慢できる僕の町、僕の島は2021年7月に

世界自然遺産に登録され、その特徴は「生物多様性」だ。少しずつ特性が違う植物や動物の圧倒的な種類の多さ、またこの島にしかない特別な種類のものが生き続けている事も強みだ。その背景には元々、陸続きにあつた場所が離れた事を繰り返した結果、この島にしかない独特の進化を遂げ、唯一のものが存在し続けているのだ。

この力強さや生き残り続ける粘り強さは、育った僕達にも「ストグレ魂」として受け継がれている。意味は「なにくそ！負けてたまるか！」という一致団結した力強さと立ち向かう姿勢の言葉だ。やっぱり自然が生き方そのものを教えてくれているんだと思う。

心のそばにいて寄り添ってくれる自然、背中を押す勇気をくれる自然、その自然とともに僕達は生きる姿勢を学び、進化していかなければならない。ともに生き残り続けるために。

そう教えてくれる僕の誇りの場所、この奄美大島と一緒にサイクリングしてみませんか。



三. 市町村代表 作品 【小学生の部】

知床地域・斜里町 代表

「斜里の自然の中で」

斜里町立朝日小学校 三年 佐藤 糸

わたしは、3年前に斜里へ移住してきました。その生活の中で、自然を通じた遊びや生き物とのかんけいのすごさにおどきました。

わたしは、去年の夏、知床のカムイワツカの滝に登りました。水は温泉で温かく、あさくて、登りやすかったけれど、1から4の滝まであつて、色んな形の岩を登るのが「おもしろい。」と思いました。途中に滝つぼがあつて、観光客の人がつかつていたので、「自然のお風呂だな。」とびっくりしました。とくに岩が多くて、すべりやすくて、わたしは2回すべりました。けれどすべるからこそ、坂でおしりをついて、すーっとすべると、すべりだいみたいでとても楽しかったです。

わたしは、3年前は、都会に住んでいたのですが、斜里には、都会でできない自然のアクティビティがあり、「楽しいな。」と思いました。

次に、生き物とのかんけいが近くておどろきました。斜里に来て、はじめて町中でキツネを見て、「なんでこんな所にいるの。」とびっくりしました。それからも学校の登校中にリスやキツネをいっぱい見かけました。けれど3年間ずっと、斜里に住んでいると、リスやキツネがいるのが普通

になってきました。斜里町のウトロという所に遊びに行く途中にヒグマがいて、みんな車を止めて、ヒグマを見ていました。車が動き出すと、次にエゾシカを見ました。斜里には、生き物がいっぱいいて「自然の動物園だな。」と思いました。ある日、ヒグマが川にいて、みんな車をおりて、川の橋の上からヒグマを見ていました。するとだれかが来て「みなさん車にもどってください。」と言いました。わたしは、自然や動物を守るお仕事がある事をはじめて知って、動物との生活のきよりは近いけれど、動物に近づきすぎないようにする事が大事だという事を知りました。

さいごに、斜里は自然がいっぱいで、空気がとてもきれいです。夕方になると、夕日がオレンジ色に光り、かがやいています。毎日きれいな夕日が見られてうれしいです。毎回わたしは、「きれいだな。」と感動しています。

学校の登校中に美じゅつ館があります。そこには、白い木が何本も植えられていて、森みたいになっています。毎日その森が目に入り、色んな野鳥の音が聞こえてきます。斜里町は都会とちがってビルがありません。けれど、ビルがなくても自然があり、空気がきれいで、生き物もたくさんいて、だから世界自然遺産になったのだと、わかります。なので、たくさんの人に、斜里の自然の魅力を伝えたいです。斜里に移住してきて、はじめてわかった事がいっぱいいて、「斜里に住んで良かったな。」と思います。

斜里は自然がいっぱいで、とてもすてきな所です。

白神山地地域・藤里町 代表

「ありがとっ白神山地」

藤里町立義務教育学校藤里学園 三年 佐々木 思温

ぼくは白神山地が大好きだ。ブナの木に囲まれて大きく息をすう。すんだ空気がおいしい。目をとじて耳をすますと、いろいろな音が聞こえてくる。ゴーゴー、風のふく音。グツグツ、土の音。パリパリ、落ち葉の音。チョロチョロ、ポトポト、わき水の音。いつも身近にある白神山地のことで、ほかの地いきの人たちにしようかいしたいところがたくさんある。

白神山地の中には、岳代自然観察教育林という場所がある。ここは白神山地のブナ林のふんいきを気軽に感じることができ森で、ぼくも小さいころから何度も遊びに行っている。ぼくはここで遊ぶことが大好きだ。たとえば、落ちている木の枝を拾って、先をとがらせて刀を作ったり、秋にはせみのぬけがらをバケツいっぱい集めたりする。どの遊びも、自然がいっぱいの白神山地だからこそできることだ。

さい近のぼくの楽しみはもう一つある。それは白神山地を観察することだ。特に、岳代自然観察教育林の中にある「四〇〇年ブナ」のことを観察している。ブナのじゅみようは二五〇年と言われているが、このブナはそれよりずっと長生きの四〇〇さい。「白神山地のシンボル」とよばれている。このままずっとぼくたちを見守ってくれると思っていたけれど一

昨年の三月にとうとうたおれてしまった。ぼくは悲しくなつて、「四〇〇年ブナはこれからどうなるのだろう。」と考えた。

四〇〇年ブナをじっくり観察する。

近くのたおれた木を見てみると、下の方が土になっているところがあった。

「ゆつくり時間をかけて、土になって白神山地のえいようになるのかな。」

日なたになっているところを見ると、小さな葉っぱが生えていた。

「ここからまた新しい命が生まれるのかな。」

そう考えると、少しわくわくしてきた。「四〇〇年ブナ」がたおれてしまつて悲しかったけれど、白神山地は時間をかけて形を変えながら、ぼくたちの生活によりそってくれているのだと思つた。

ぼくの住んでいる秋田県藤里町の冬は雪深く、白神山地も真っ白になる。春になると少しずつ雪がとけて、夏になると緑いっぱいの景色を見せてくれる。なんといつても秋の紅葉は最高の景色だ。赤や黄色、オレンジなどに葉が色づき、目の前にカラフルなブナ林が広がる。世界中の人に見てほしい景色だ。ぼくは、一年中白神山地の景色に元氣とパワーをもらっている。

ぼくは、この景色を守りたい。もっと白神山地のことを調べて、知りたいと思う。そしてこれからも白神山地と一緒に楽しい毎日を送っていきたい。白神山地、ありがとっ。これからもずっとずっとよろしくね。

白神山地地域・深浦町 代表

「深浦ナンバーワン」

深浦町立深浦小学校 四年 阪崎 岳彪

ぼくは、白神山地が大好きです。理由は、大きく分けて三つあります。

一つ目の理由は、不思議な花がたくさんあることです。たとえば、名前は分かりませんが、道にある茶色のこなを出す花です。やさしく押すと、こながふわあと出てきます。さわり心地はやわらかくて、少しでも力を入れると一気に出てきてしまいます。しかも、なかなか見つかりません。十分間、一生けん命探してやっと見つかるレベルです。その花を見つけたしゅん間とてもしあわせな気持ちになります。また、森林教室でもたくさんの、木や花を学びました。係の人に教えてもらいながら、ギンリョウソウやヤマモミジ、イタヤカエデなどを探しました。いつも何気なく見ている木や花も、たくさんの特ちょうがあつてとてもおもしろかったです。特に、イタヤカエデがメーブルシロップになるのが不思議でした。

二つ目の理由は、白神山地にしかない動物がいることです。白神山地には多種多様な動物がいます。その中でも、王道の「アカショウビン」は、全体的に赤色でとてもめずらしい鳥です。鳴き声も、よく聞かないと聞き取れません。

「ピュピュピュユーー！」
という鳴き声が聞こえてきたら、アカショウビンが近くに

るしょうこです。静かに声がする方を見てください。めったに見ることができないアカショウビンがいるかもしれません。三つ目の理由は、十二湖での思い出です。ぼくは、深浦小

学校で何回も十二湖に行きました。一年に一回の全校遠足や四年生で行った森林教室などです。森林教室では、丸太切り体験をしました。係の人におさえてもらいながら、うでよりも太い丸太を何度も切りました。何回も切っていると、だんだんくせになってきます。理由は、何度やっても大変で上手に切れなくて、それでもがんばり続けてやっと切れるからです。最後に、のこぎりがきれいに通る感かくがとてもくせになります。その時にできたコースターは、今でも使っています。また、森林教室では先ほど言った木や花についても学びました。たくさんのかを学べただけではなく、楽しみながら活動することができて最高の思い出になりました。全校遠足では、十二湖をみんなで歩いたり、はんでお昼ご飯を食べたりします。きれいな青池で写真を撮ったり、ブナの水を飲む音を聞いたりと、楽しい活動がとてもたくさんあります。

このように、白神山地にはほかの場所にはない魅力があります。楽しい活動やきれいな花、いやされる木などは白神山地にしかないよさです。みなさんもぜひ、白神山地に遊びに来て、白神山地の魅力を知ってください。

白神山地地域・西目屋村 代表

「未来に残す白神山地」

西目屋村立西目屋小学校 五年 三浦 樟己

ぼくたちが住んでいる西目屋村には、世界遺産白神山地があります。白神山地は、人が住んでいるところからはなれた山のおくの方にあるので、ぼくは、あまり行ったことはありません。学校では、総合的な学習の時間に白神山地について学習しているので、四年生の時には、季節ごとに白神山地に近いところへ行つて森の観察をしました。

春には、人の住んでいるところに近い里山に行きました。食べられる山菜やクロサンショウウオ、モリアオガエルのたまごなどを見つけました。そこで学習したのが、スギ林とブナ林のちがいです。地面の土を比べると、ブナの森の土は、ふわふわしていて温かい感じがしました。土にもにおいがありました。栄養たっぷりの土がどのように作られていくのかが分かりました。

秋には、白神山地のかんしように地いきに近いところまで行きました。せの高い大きな木がたくさんありました。森の中は暗かったのですが、大きな木がたおれているところでは、すきまから、日光がさしてきていました。ここで学習したのは、木の世代交代です。木にもじゅ命があり、何度も世代交代をくり返して、八千年という長い間、ブナの森が続いてきたことが分かりました。また秋の森には、き

のこを採りに来ている人もいました。人間は、森からたくさん豊かなめぐみを分けてもらっていると感じました。

冬にも森に行きました。いつもよりとても雪が少なかった年でしたが、スキーウェアを着て、ときどき、雪にこしまでもまりながら、歩いて行きました。葉が落ちた森は、とても明るく、遠くまでよく見えました。いろいろな動物の足あとや木の枝の先の冬芽を見つけることができました。

「コンコンコン。」

という、キツツキのドラミングを聞いた人もいました。

季節ごとに森に行つてみて、白神山地の自然のすばらしさがよくわかりました。

五年生では、この自然豊かな白神山地を未来にどう残していくかを考えました。ぼくは、白神山地のことをたくさんの人に知ってもらうことが必要だと思います。

白神山地に関わる、ガイドさんやかん境省の自然保護官、観光客の方々のお話を聞き、自然のすばらしさを知ることが、自然を大切にしようとする気持ちを強くすると思ったからです。

白神山地が、これからも長い間残っていくためには、シカの食害、人間によるい法行いやナラがれ、自然かん境の変化による土しや災害など、さまざまな課題があります。ぼくは、自然を愛する人たちが、みんなでよい知えを出し合い、これらの課題に対して、急いで行動を起こさなければならぬと思います。

白神山地地域・弘前市 代表

「未来へ届け！白神山地の豊かな恵」

弘前市立岩木小学校 五年 山崎 吉歩

「この景色、この音、この匂いを、今生きている人、そして未来を生きる人達にも感じてほしい。」

ぼくがそう思った理由は、白神山地にある、乳穂ヶ滝の近くで川遊びをしていた時、自然のすばらしさに心を引かれたからです。家族で車に乗って川へ向かっている途中、川の様子を見てぼくは、

「なんだ、川の水が緑色ににごっているじゃないか。もっと透明できれいな水じゃないんだなあ。」

と思いました。しかし、実際に川に近づいてみると、水の中で砂や小石がまう様子が見えるほど透き通った水だったので川が緑色ににごっているのではなく、木の葉を映していたからでした。弟は、

「すごく冷たくて気持ち良いー！」

とびつくりして、ぼくは、

「家の近くの川とは違って透明できれいだね！あつ魚だ！」と言いました。お父さん、お母さんが、ぼく達の遊んでいる様子を見て、うれしそうに笑っている顔が今も頭に残っています。森の中では、たくさんセミ達が太合唱をくり広げていました。その中で耳をすますと、木の葉や枝が、サラサラ

と風でゆれている音が聞こえ、まるで自然の音達がぼくに話しかけてくれているようでした。また、そよ風に乗って草木や土のふんわりした匂いがただよい、とても心が落ち着きました。

この体験から、ぼくは白神山地の事を知りたくなり、くわしく調べてみました。すると、白神山地は一九九三年に、日本初の世界自然遺産に登録された山地だという事がわかりました。白神山地のブナの森は、「緑のダム」と呼ばれるほど保水力に優れていて、山地にたくわえられた豊富な水は、川から海へ、海から空へ、そして雲になると、白神山地のブナの森に雨をふらせます。つまり水は、「陸」、「海」、「空」を循環しながら、ぼく達の飲料水や農業用水などに使われている事がわかりました。ふだんの生活で何気無く使っていた水は、自然の「命」だという事でした。だから、水が当たり前のように使える事に感謝し、一滴、一滴を大切にしたいです。

ぼくは、白神山地の豊かな自然環境が悪化しないよう、むしろ今よりも、もっともつと美しい状態を残せるように、ぼく達に出来る事を考え、実行する事が自然への恩返しだと考えます。あの日、お父さん、お母さんが笑いながら思っていた事は、ぼくが感じている気持ちと同じだと思います。ぼく達が「今」受けている自然の恵みを、「未来」へ届けられるように、みなさんも自分が出来る事を考えてみませんか。

白神山地地域・八峰町 代表

「知」の継承

八峰町立八森小学校 六年 小林 青羽

「これは熊のつめあとだよ、見える？」

ガイドさんがブナの木の幹をつえで指した。するどいもので深く幹をけずったあとが見える。

ぼくの学校、八森小学校から車で二十分ほどのところにある白神山地の『留山』。昔から大切に守られてきた里山で、樹齢三百年以上のブナやミズナラの巨木を見ることができ『留山』の名称は、江戸時代から木を切らずに留めてきたことに由来し、森を守るため、現在はガイド同伴でなければ入ることができない貴重な場所だ。ぼくたちは学校のジオサイト学習で何度か足を踏み入れている。

「熊が何を食べているか知ってる？」

いきなりガイドさんに聞かれ、戸惑った。熊はどういうイメージだから、

「肉ですか。」

と答えると、キョロキョロとあたりを見回すガイドさん。

「ああ、あった、あった。熊はこれが好きなんだよ。」

ガイドさんがつまみ上げたもの。どんぐりほどの大きさで、皮が四つに分裂し、まるでチューリップの花のよう。それは、ブナの実の殻だった。殻は開いてしまっていて、実はなかったが、こんな小さなものを食べていることに驚いた。

「今年はブナの実がとっても少ないんだよ。熊が町にも出るかもなあ。」

そのときは何気なく聞いていたが、実際、この年は、秋口から熊が町のあちらこちらに出没し、柿の実を食い散らかしたり、畑をうろうろしたりして、後からガイドさんの言葉を思い出し、驚いたことを覚えていた。

夏に訪れたときは雨天だった。

「黒いすじが見える？」

ガイドさんが叫んだ。それは、樹幹流。

「雨の日しか見られない、特別なものだよ。」

ブナの幹をつたう黒いすじが、根元へとまっすぐに流れ落ちていく。ブナからのたくさんのお養分を含んだ雨水が、この山の土を潤しているのを目にすることができた。レインコートの中が蒸れて、ちよつと不快な気分になっていたが、それも忘れて樹幹流に目を奪われていた。

ぼくたちの人生はたつた百年ほど。だから、自然の移り変わりのほんの少ししか見ることができない。木が枯れて倒れたり、葉が落ちたりすると、少しさみしい気がする。

でも、それによって、小さな木に光が差し、落ち葉が栄養になる。そうした営みが、気の遠くなるような長い年月繰り返されてきて、今、貴重な森の豊かさを、ぼくたちは目にすることができている。この奇跡に感謝したい。

動植物が互いに支え合いながら共生している白神山地。いつも見ているふるさとの景色が特別なものだということを、たくさんの人に伝えていきたい。

白神山地地域・能代市 代表

「いつまでもつづけ、白神山地」

能代市立二ツ井小学校 六年 成田 一真

白神山地が日本で初めて世界遺産に登録されたことを知った五年生のころ、とてもおどろいたことを覚えています。しかも、本州唯一の自然遺産と知り、毎日見ている景色がとてもいとおしく、誇りに思いました。

先日、白神山地の勝手口プロジェクトに参加したとき、ぼくたちが通っている学校が白神山地の中にぎりぎり入っていることを知らされました。このプロジェクトは、白神山地のふもとにある二ツ井にたくさんの人を呼びこみ、元気にしようという活動でした。勝手口をあげると白神山地が見える、まるでどこでもドアにカモシカやクマゲラの絵を書きました。また、外国の人にきみまち阪のよさをPRする動画も作り、国内外から白神山地を見に来てくれる人が増えますようにと、みんなで一生懸命考えたプロジェクトは、大成功でした。

では、なぜ自然遺産に登録されたのだらうと新たな疑問が浮かびました。それは、世界最大級の原生的なブナ林が自生しているからということが分かりました。しかも、人為の影響を受けていないのです。五年生の時留山に登ったとき、ブナ林の中を歩きました。目を閉じて耳をすますと、白神山地に住んでいる鳥たちのさえずりが聞こえました。

また、熊が木を登ったときにできた、つめあとを見ることができました。ブナの木に耳をつけてみると、地下水を吸い上げる音がドクンドクンと聞こえるのだそうです。自然が生み出す多くの絶景が点在し、大自然のエネルギーにあふれ、日々の疲れをいやし、パワーを充電できる場所なのです。

しかし、今、白神山地では、気候変動の影響によりブナ林が少しずつ変化する可能性が指摘されているようです。しかも標高一二〇mから山頂にかけては、現在ブナが生えていないのだそうです。地球温暖化は、遠く北極や南極の話だと思っていたけど、ぼくたちの住むこの地にも影響をおよぼしていることに気がきあぜんしました。

そこで、白神山地を含む他の自然遺産を保護するために、地球温暖化をおさえるにはどうしたらよいかという課題が出てきます。自分にできることはないか考えました。まずは節電、節水に心がけていくことが自然遺産を守ることにつながると思います。そうして自分が行動し、呼びかけることで周りの人にも影響をあたえられると考えます。水の波もんが広がるように一人一人が意識することが大切だとぼくは考えます。

今、目の前にある、誇れる白神山地が百年後も千年後も今のままで残っていてほしいと強く思います。いつまでもつづけ、大好きなふるさと二ツ井、白神山地。

奄美大島 徳之島 沖縄島北部及び西表島地域・宇検村 代表

「自然が豊かな奄美大島」

宇検村立田検小学校 六年 久保 聡祐

「自然遺産に住めるってすごいね。」

ぼくが奄美大島に来る前に父と話した会話だ。

奄美大島に来たのは、三年前。奄美の印象は、海や山が多く、海がきれいということだった。ある日の帰り道、うわあと、急に父がおどろいた声を出した。前の車から降りたおばあさんがハブとり棒でハブをつかまえ、ゴミ袋に入っていたのだ。その時ぼくは、奄美にしかない生き物の存在と、奄美に住む人のたくましさを感じて実感した。その出来事があったから、奄美の自然のみ力に改めて目を向けるようになった。奄美には不思議な場所がある。その一つがマングローブ林だ。海水と淡水が混ざり合うところに生えている林だ。ふつう、植物は海水につかっていると枯れてしまうが、マングローブの植物は、そんなところで生活できるというミステリアスな生態をしている。このマングローブ林にカヌーで入ってみた。水の下には魚が泳いでいるし、干潟に上がれば、小さなカニやハゼが歩いている。試しに水をなめてみた。すると、確かに海と同じぐらいしょっぱい。こんな場所で、多くの植物や動物が生息していることに感動し、やっぱりミステリアスだなあと考えた。

さて、奄美大島は、島というだけあって海が近い。買った

ばかりの自転車がすぐ潮風でさびるくらいだ。そんな奄美大島の海だが、他の所に負けないきれいだ。例えば、船越海岸。海の底が見え、水はエメラルドグリーンにキラキラと輝いている。その海に住む多くの魚たちも、大きさが違い、面白い。また、ホエールウォッチングもできる。海を眺めていると、ザッパン。大きな音とともに水しぶきがかかった。一瞬だけ見えた黒い物体。ザトウクジラだ。テレビとは比べ物にならない大きさに、ぼくは立ち上がって声を出した。図かんで見ていてその大きさをしっていたはずなのに、改めて人間よりはるかに大きい動物がいると感じた。奄美大島の海には、小さな魚から大きな魚、ほ乳類まで、様々な生き物が住んでいる。近年サンゴの白化などが問題視されているが、それが原因でこれらの生き物たちがいなくなるならないようにするにはどうすればいいのか、考えていく必要がある。

ぼくの周りには山や海があり、山に入れば、ハブやそれを捕まえているおばあさんが、海に入れば、小さな生き物から、クジラのような大きな生き物がいる。空にはサシバが、ピクイーと元気に鳴いていて、様々な生き物が住むマングローブ林がある。奄美大島のみ力、四方八方を自然に囲まれていて、その中に、数えきれないほどの多くの動物たちが生きているところだ。これからは自然にふれるだけでなく、その自然を長く保存していくために何が自分のできるのか考えていきたい。

奄美大島 徳之島 沖縄島北部及び西表島地域・瀬戸内町 代表

「私の町は世界自然遺産」

瀬戸内町立阿木名小学校 四年 坂口 輝都

私の町は世界自然遺産です。六年前に引っこしてきたときはまだ世界自然遺産ではなかったけれど二〇二一年七月に奄美大島は世界自然遺産に登録されました。日本にはまだ五か所しかないと思うほどおどろきました。

奄美にはたくさんのおもしろい動物がいます。特に有名な動物はアマミノクロウサギです。アマミノクロウサギはマングースによって数がとてもへり、絶滅危惧種に指定されたそうです。これ以上へらないように「ロードキルをなくそう」という取り組みが行われています。アマミノクロウサギは、道路などの開けた場所でフンをするので車によくひかれてしまうそうです。そこで、アマミノクロウサギを守るために、速度を落とすようによびかけるかんばんなどが設置されています。私は朝早くに家族と出かけたとき、一度だけアマミノクロウサギを見たことがあります。ピョンピョンとはねるすがたがかわいくてこのアマミノクロウサギを守るためにもロードキルがなくなつてほしいなと思いました。

その他に、奄美大島といえばやはり海です。近くにウミガメが見られる場所があったり、サンゴしょうの近くをおよげます。夏にはよく海に行きます。少し深い所

まで行くとさんごの周りにすぐきれいな魚がいます。そして、奄美大島にしかないアマミホシゾラフグという魚もいます。このアマミホシゾラフグは十センチほどの小さな体で、一メートル以上のミステリーサークルを作ります。このミステリーサークルは、メスが安心してたまごを産めるようにオスが一週間ほどかけて作ります。これを見られるのは、かぎられた場所で四月から七月の限られた時間だけです。オスはみんなで協力して作るのではなく一人で時間をかけて作るそうです。このミステリーサークルは、二〇一一年にアマミホシゾラフグが作っているというのが発見されました。

このような、めずらしい生き物やきれいなさんごしようがある奄美大島が大好きです。ぜひ、世界中の人たちにも奄美に来て、たくさん自然を見てほしいです。奄美にはまだ発見されていない生物や植物を守るためにも自分たちがくらす地いききにゴミが落ちていたら拾ったり、海にゴミをすてないように気をつけたいと思います。そして、これからいろんな生物を発見したいです。

奄美大島 徳之島 沖縄島北部及び西表島地域・龍郷町代表

「あまみいろシヤッターチャンス」

龍郷町立赤徳小学校 二年 四位 悠眞

「手広海がんとて、この道ですか。」

家の前で、サーファーに道を聞かれることがあります。ぼくのすむ、あまみ大島は海にかまれています。サーフィンやダイビングの青い海や白いなみ。モーター・パラグライダーから見えるキラキラした、お日さまの黄色。遠くまで広がる山のみどり。ハイビスカスの赤。たくさんの方をワクワクをきたして、夏にやってくる人が多いと思います。

じつは、雨が多く一日の天気も変わりやすい、あまみ大島だから予定へんこうに、ぼくたちは、なれっ子です。「ヨーリ、ヨーリでいいが。」あまみの方言で、ゆっくり、ゆっくりでいいよというみです。ぼくは、この言葉がすきで、心の中でくりかえしとなえると、気づくこと、見えてくるものがあります。

「キヨロロロ。」

リュウキュウアカシヨウビンが鳴き出すと、遠くから仲間がへんじをします。つゆのじきによく鳴くので、雨こい鳥とよばれています。ぼくのかさよりも、はでなオレンジ色の体をしているのに、一生けんめいさがさないと、あつという間にとんでいく、かくれんぼ名人です。足元に黒色のシリケンイモリが、雨音にさそわれ、ヨーリ、ヨーリ歩いていて、ぼく

が道をゆずります。黒いせ中だけれど、おなかは赤色。なかなかのオシャレさんです。でも、ひふにどくがあるので、かつこいすがたを、かんさつしながら、びこします。

秋の日には、タカの仲間のサシバが、たびのひと休みで、おじゃまします。

「ビックイー、ビックイー。」と鳴くと、王さまのマントのように羽を広げてとんでいます。ぼくも、いつしよに空をとべたらいいなと思つてしまします。

冬のさむい日には、木のえだに、たくさんの方のリュウキュウアサギマダラが羽をとじて、とまつていて、おしくらまんじゅうをしているように見えます。首をかしげると、つな引きをしているようで、おもしろいです。日が当たると、羽を広げて体をあたためたりとび回ったり、羽が光をはんしやさせて、水色まだらの花がさいているようで、とてもきれいです。

あまみ大島には、どくをもつハブ、アマミノクロウサギ、ルリカケスなど、有名などうぶつもいます。でも、あまり知られていないどうぶつやよくぶつが、たくさんあります。キラキラした目ばかりではなく、どんな日でも、ちよつとした発見が心をうごかします。

今は冬、雨上がりの水たまりのにおい。外には、ピンク色のひかんざくらが春をまつています。メジロが友だちといっしょに花のみつをのんで、かわいい声で鳴いています。心のシヤッターチャンス。あまみ大島で、たくさん見つけることができますよ。

奄美大島 徳之島 沖縄島北部及び西表島地域・天城町代表

「徳之島のお気に入りの音、しょうかいします」

天城町立天城小学校 三年 吉岡 瑛美

「ザッパン、バッシヤーン。」

めがね岩のめがねの部分をくぐると、東シナ海がどこまでも大きく広がっています。風がふき、波が岩におもいつきりぶつかって、白い波しぶきがぐりかえします。ちよつとこわいけど迫力があります。固いごつごつした岩の上で、どきどきしながら海をながめる私は、いつもの私より小さく思えます。めがね岩がいつも聞いているこの音が一つ目のお気に入りです。

二つ目は、やつぱり鳴き声です。徳之島では、一年を通して鳥や虫の元気な鳴き声が聞こえます。秋の夜は、虫の声の合唱で、ねる直前まで草むらにいろような気がします。毎年季節づいて来てくれる鳥もいます。春から夏にかけてはアカシヨウビンが「ピーヨロヨロヨロ、ピーヨロヨロ」といゝろんなところで鳴いて、赤い美しい姿を見せてくれます。秋になるとサシバの鳴き声が、「クッククイー、クッククイー」とはじまります。風にのって、まるでたこのように気持ちよさそうにとんでいます。朝から元気な鳥たちの鳴き声を聞いて、私は学校に向かいます。

「ビューイ、チューイ。」

さい後にしようかいしたいのは、この音です。昨年の十二

月の夜、家族で森のナイトツアーに行ったとき、高い鳴き声が聞こえてきました。ガイドさんが、

「アマミノクロウサギが鳴いている声です。」と、教えてくれました。アマミノクロウサギは黒くて、丸まるしていて、耳が短くて、とがったつめがあります。大昔のウサギの姿で、生きた化石と言われているそうです。森を歩くとかわいいうんちがたくさん落ちています。手に取ってにおうと草のにおいがします。私は何度もクロウサギを見たことはあったけど、その声には気づいていませんでした。アマミノクロウサギのお母さんは赤ちゃんが敵にみつからないように、す穴にかくして土をかけて、二日に一度くらいおっぱいをあげに来るそうです。赤ちゃんはたった一人で暗い穴の中でお母さんを待っている間、どんなことをしているんだろう、さみしいだろうなと思いました。私は、昼でも一人での守番するのめいやです。鳴き声は、お母さんが赤ちゃんに「もうすぐ会いに行くよ。待っていてね。」と、遠くから話しかけているのかも知れません。ツアーの中で、小さな子どもがウサギが、穴にピヨコンと入っていくところを見ました。す立ち前になると、お母さんは穴をかくすのをやめて、子どもは、す穴から自由に出入りができるそうです。小さいけれど、たくましいウサギの子どもです。

私は徳之島の自然のことを知るのが楽しいです。これからもずっと、お気に入りの音が聞けるといいなと思います。徳之島の自然の宝物を大切にしたいです。

奄美大島 徳之島 沖縄島北部及び西表島地域・東村 代表

「やんばるの自然が大好き」

東村立有銘小学校 五年 田中 なつめ

「ビュールルルル。」

父が育った東村に引越して初めてアカシヨウビンの鳴き声を聞いた時、面白い鳴き声だなと思いました。沖縄県内の引越でしたが、別名やんばると呼ばれるここは山と生き物が多く、環境の違いに驚きました。

転校してすぐの春、通学路や庭にまで日本最大級のオオゴマダラが舞っていました。キラキラ輝く黄金の卵はきれいでした。夏は家族で山にオキナワキノボリトカゲを探しに行き、川ではテナガエビをとりました。テナガエビを揚げて食べたら、ほつぺたがおちるくらいおいしかったです。そして秋を告げるサシバの鳴き声、冬には濃いピンク色の鮮やかなヒカンザクラ、毎日自然を感じることができました。夜の昆虫観察会に参加した時は、沢山の昆虫に会うことができました。やんばるではどの昆虫も大きいから不思議です。夜がふけると森林の香りが濃く深くなってきました。昼のむつとする青々とした香りとはまた異なります。

沖縄で山の日全国大会が開催されるため、私達クラスもやんばるの自然について発表することになりました。そのためマングローブやその中に暮らす生き物について調べました。そして、外来種が在来種であるマングローブの生態系を脅か

していることを知り、地域の方々と駆除活動することになりました。繁殖力が高い外来種であるツルヒヨドリの根を残さないようにていねいに抜き取りました。私は沢山とれたことにびっくりしたけれど、前回の約5分の1の量だと聞いて腰を抜かしそうになりました。それと同時にみんなの努力と、その成果が出ていることに感動しました。

それからやんばるは希少な固有種や絶滅危惧種が数多く生息していることが認められ、世界自然遺産として登録されたことを学びました。亜熱帯気候と生物多様性も特徴で、日本の爬虫類・両生類の約六割がやんばるに生息しているそうです。校庭の「グオグオツ」というカエルの大合唱や、朝露でキラキラするブロッコリーのようなイタジイの木が頭に浮かび納得です。

私は自然の宝庫に囲まれて生活しているのだと実感しました。でも身近だからこそ私たち一人一人の行動がすぐに自然環境に大きく影響してしまいます。オーバートーリズムについても考えていきたいです。この偉大なる世界自然遺産は住民も観光客も一丸となって守っていなければなりません。

父はヤンバルクイナを見たことがあります。私は自然の中で生きるヤンバルクイナに会ったことがあります。ヤンバルクイナがずっと元気に暮らしているように自然を守っていきたいです。そして、ヤンバルクイナと自然の中で出会えるその日を楽しみにしています。私はやんばるの自然が大好きです。

三. 市町村代表 作品 【中学生の部】

知床地域・斜里町 代表

「私の大切なモノ」

斜里町立斜里中学校 二年 高橋 結衣

朝、窓を開けると「ピピピッ」と鳥の声がします。家を出ると狐と出会います。風が吹くとざわざわと木が揺れます。私が住んでいるのは、世界自然遺産知床です。

私はきれいな石を見つけたら、すぐに拾ってお気に入りの箱にしまっています。時間があればしゃがんで蟻の観察を始めます。初めて都会と言われる場所に行った時に、それは斜里町だからできることなんだと気づきました。都会の地面はすべてコンクリート。夏はあつすぎて蟻一匹見つけることができません。だから私はこの自然を大事にしたいと、また深く考えるようになりました。自然がもたらしてくれることはたくさんあります。例えば湧き水。オホーツクサイクリングの練習で来運神社に行った時、昔から運動が苦手な私はそこにたどり着くまでも苦勞しました。でもそこから出ている湧き水を飲むことで元氣になり、無事家に帰ることができました。このように自然は私をたくさん励ましてくれました。でも時には暴れ狂うときもあります。学校の下校中ものすごい風と雪で思うように動けないことがあります。でもその時、知り合いの人の車が通りかかり、家まで送ってもらいました。たまには人間にとつては過酷なことだってありますが、それらのお陰で繋がる

る人もいます。自然はたくさんさんの贈り物を私達にくれているのです。

人間と同じように想うことができるのなら、自然には感情のようなものがあるのではないのでしょうか。人間は嫌なことがあれば嫌だと言えますよね。これは私の考えですが、自然だってゴミを捨てられたら嫌だと思います。だから嫌だと言えない代わりに災害で私達に訴えかけているのではないのでしょうか。私はおじいちゃんの家へ行く道のゴミ拾いをしました。3袋分のゴミが集まりました。あなたはどう思いますか。私達が捨てているゴミのせいで地球が悲鳴を上げています。自然は昔から人間の隣にいます。だからみんないることを当たり前に思っている。でもそんなことはないです。冬でも暖かくて雪が溶けています。大好きなスキーだって、できる期間が減りました。人間は自然と対等に生きていましたが、今は私達が痛めつけています。私はそんな自然を守りたい。ここ数年で世界の自然を守る取り組みが話題になってきました。私もそのように伝えていきたい人になりたいし、それを実行できるようにしたい。今自分ができることはゴミ拾いや植樹などのちよつとしたことですが、少しでも自然の負担が軽くなるように努力していこうと思います。

自然と人間はいつでも友達でありたい。自然が自分を応援してくれたように、私も自然に恩返ししていきたい。なぜなら自然は私の家族だから。

白神山地地域・鱒ヶ沢町 代表

「自然との共存戦略」

鱒ヶ沢町立鱒ヶ沢中学校 二年 柳 遥香

私達は、自然や生態系とどのように向き合い、共存していけばよいのだろうか。

私が住んでいる青森県や秋田県に存在する白神山地、それは一九九三年に、日本で初めて世界自然遺産に登録されたブナ原生林を象徴とする場所である。ブナの木には緑のダムとも呼ばれ、高い保水力と腐葉土による濾過機能がある。濾過された水は川となり、森林に住む生物の他に、農業用水や事業用水としても使われ、多くの恩恵をもたらしているのだ。

私はふるさと学習の一環として、小学二年生の時に、ネイチャーゲームをして、森林内にある様々な植物を探したことがある。ただ広い自然の中で、植物の多さに驚いたことを今でも憶えている。今考えてみると、貴重な体験をしたものである。他にも小学四年生の時、白神山地の湧き水を使用して販売している企業を見学に行ったこともある。鱒ヶ沢町では、白神山地を有する面積が大きく、観光や事業の上で外せないポイントだ。

しかし今、白神山地に問題が起きているのである。それはナラ枯れだ。カシノナガキイムシという虫が主な原因

である。その言葉を聞いたときに、私はどこか不安な感じでいっぱいになった。なぜなら、似た様な松くい虫のニュースを、以前見たことがあったからである。木が枯れたという話を聞くと、思い出される松くい虫。日本列島をだんだんと北上して、今や深浦町と鱒ヶ沢町でも被害がでていると、ニュースで取り上げられていた。秋でもないのに、紅葉したかのように見える松だが、実はもう回復する手立てがないと知った。各都府県で対策しているのだが、現状はあまり良くないのが現実だ。このまま白神山地にナラ枯れが進んでしまったのなら、八千年前から続いてきた自然環境は破壊され、いずれ私達の生活は送れなくなってしまうだろうと予想できてしまった。

ならば、どのような対策をとれば良いのだろうか。そもそも、ナラ枯れの原因である虫達が北上する理由はなぜなのか。その一つに、地球温暖化がある。地球温暖化を防ぐために、私達にできることは少なくない。私は白神山地の美しい風景を見るのが好きだ。白神山地から流れる水によつてできた赤石川。そこで釣ることのできる金鮎はおいしい。私は、未来でこの喜びを感じることができなくなるのは悲しい。だからこそ、地球温暖化防止のために一つ一つできることを私はしていきたい。

それが自然や生態系と向き合うためにできる最大限の思返しであり、白神山地を通して考えた私の共存戦略である。

白神山地地域・八峰町 代表

「自然とともに」

八峰町立八峰中学校 三年 小林 莉桜

「八峰町のどんなところが好き？」そう聞かれると私は必ず「山と海が綺麗なところ」と答える。

東を見れば迫力ある白神山地が、西を見れば広大な日本海が広がるこの八峰町の自然はいつ見てもため息が出るほど綺麗だ。

季節が変わると白神山地は色を変える。春は山桜に身を包み、夏はブナの葉の深々しい緑に染まり、秋は楓とイチヨウでこんがり染まり、冬になるにつれて雪に覆われ白く光る。「もう冬だねえ。」と、てっぺんを白く染めた山を見ながらおばあちゃんが呟くと私は本格的に冬を実感する。

私が一番好きな季節は春である。春になると山の麓に桜が咲き、少し遅れて濃いピンクの山桜がまるで春の訪れを喜んでいるのかのように山全体を紅潮させる。「山がお化粧しているみたい」いつしか妹が山を見て言ったことを今でもずっと覚えていて。「山がお化粧」なんてとても非現実的な表現だが、春の美しい白神山地を表すにはぴったりだと私は思っている。

西に目をやれば美しい日本海が太陽を反射してキラキラと輝いているのが目に入る。「悩みごとがあったら海に行くと良いよ。」そうおばあちゃんに教えてもらってから私はな

にか悩みができる度必ず海に行くようになった。海風にさらされて肌がびりびりと痛むのを感じながら目を瞑ってすうっと息を吸い込んでみるとしよっぱい海の匂いと絶え間ない波の音でまるで自分が海の一部になったような感覚に陥る。規則正しく押し寄せる波の音を聞きながら「海の声」とはこういうもののことをいうのだろうかなんて考える時間は私にとってもお気に入りの時間だ。

日本には「風光明媚」という四字熟語がある。山や川、海など、自然の景色が清らかで美しく、素晴らしく眺めが良いという意味だ。私はこの四字熟語の意味を知ったときに一番先に八峰町が思い浮かんだ。雄大な白神山地と日本海に囲まれているこの八峰町は風光明媚そのものだ。

自然は人間に様々な影響を与えてくれる。空気や水を綺麗にするなど環境面でもたくさんいいことはあるが、不安やストレスの軽減をしたり、幸せホルモンの分泌を高めたなど精神的にも良いことがたくさんあるのだ。

私はこんな自然に恵まれた八峰町に産まれてとても幸せである。美しい自然に囲まれて、いつでも白神山地から汲んだおいしい水を飲むことができる。そして、ちよつと疲れたときには自然の中で一息つく。産まれたときから身近にあるこの素晴らしい自然を当たり前だと思わず、日々感謝して生活したい。

白神山地地域・能代市 代表

「白神山地のある暮らし」

能代市立能代南中学校 一年 畠山 璃紗

私の通う能代南中学校から、白神山地の雄大な姿を一望することが出来ます。春から夏にかけては青く生き生きとした姿を、秋には金色の稲穂を揺らす風の先にある優しい姿を、冬には雪におおわれた静かで神々しい姿を眺めることができます。通学では白神山地を望む道を友達や先輩と歩いていきます。吹いてくる風が頬を優しくなで、たくさん鳥が一斉に鳴き、そして、雲ひとつない広い真っ青な空を見上げることが出来ます。一人ではなく友達や先輩と見るこの風景は、きっと大人になっても忘れないだろうと、心の中がふんわりと温かくなります。そして、目の前に広がる自然と、隣に一緒にいてくれる友達、先輩にありがとうという気持ちでいっぱいになります。

私の住む能代市は、東から西に米代川が流れています。白神山地から流れる粕毛川の水は米代川へと流れ込み、能代市へとやってきました。私たちの生活は米代川なしでは成り立ちません。木都と言われる能代の歴史や文化は、米代川とともに築き上げてきたものです。現在の私たちの生活も水道水をはじめ米代川に生活の基礎の多くを頼っています。しかし、米代川は恵みだけでなく、時には恐怖も

与えてきます。令和五年の水害では、私の家も床上浸水になり被災しました。毎日窓から見ていた景色は、どんどん水におおわれていき、家の中にも静かに水が上がってきました。少しづつ階段を上がってくる水に恐怖を覚え、家が全部水没してしまつたらどうしようと不安でいっぱいでした。自然の力の前には、私はあまりにも無力で何もすることができませんでした。

また、私の住む地域の田んぼには白神山地の一角である藤里駒ヶ岳の素波里ダムの水が送られてきています。四季折々の姿を見せてくれる田んぼは、夏には生命力あふれる緑色が広がり、夜は蛙の鳴き声が騒々しいです。虫の音に変わった後は、秋の美しい金色の景色となり、つやつやで甘くふつくら美味しいお米となります。そして今は冬。私の家の前でも、三十羽を超える白鳥が真っ白な田んぼの上で賑やかに集まっています。人間や鳥などの生き物は、白神山地に命を守られ、育まれているのだと感じます。

白神山地は、世界最大級のブナの原生林で、非常に貴重であり、後世まで私たちが守っていかなければならない世界の宝物、世界自然遺産です。日常の風景が、そのように貴重な白神山地であることを、私は誇らしく思います。そして白神山地に守られ、育まれていることを忘れずに毎日を大切に過ごしていきたいと思っています。

奄美大島 徳之島 沖縄島北部及び西表島地域 宇検村 代表

「未来へ……」

宇検村立名柄中学校 二年 内田 翔己

エメラルドグリーンの海、万緑あふれる山々、路傍で出会う固有種の生き物たち……奄美で生まれ、奄美で育った僕は、この島が大好きだ。

しかし、夏休み、僕は都会の便利さに驚愕した。沖縄へ家族旅行に行ったときのことだ。食べ物や必需品、充電器など全てが随所にあるコンビニでそろった。コンビニやスーパーが一つもない宇検村ではそうはいかない。僕も都会に住みたい。すぐにコンビニに行きたいし、ファストフードも食べたい。宇検村がもつと都会だったらなあ。

そう憧れを抱くと同時に一つの疑問が浮かぶ。本当にそうだろうか。コンビニやファストフード店、ビルが立ち並ぶ都会は、自然を代償にしてはいないか。都会の景色を、ここ奄美で実現すれば、世界遺産の自然は保たれなくなるのではないか。一度手を加えようと、自然は二度ともとは戻らない。一度手放すと、どんなに手を伸ばしても取り戻せない。その鉄則を知っているから、奄美の自然は今日まで守り続けられてきたのだ。

僕らの宇検村は、これから変わり続けていくことだろう。世界自然遺産の島として、発展することも考えられる。大きなショッピングモールができ、宇検村にコンビニができ、

生活が便利になる日もくるかもしれない。

そんなとき、世界遺産の自然はどうなっているだろう。アマミノクロウサギの巣穴は侵されていないだろうか。ハブは山の守り神で居続けるだろうか。今と変わらず、夜には虫の音が聞こえ、天の川が見えているだろうか。ショッピングモールやコンビニが立ち並ぶ未来は、世界自然遺産としての奄美の姿といえるのだろうか。僕らがもし選択の一つでも間違えば、自然遺産としての奄美の姿は二度とみられないかもしれない。

未来への選択を迫られたとき、根底にあるものは、いつの時代も変わらず、「奄美」そのものでなくてはならないはずだ。僕らは奄美に暮らす生き物であり、奄美の自然の一部なのだから。

人間社会は、多様な考えの集合体である。人の数だけ考え方や主張があり、自然への捉え方も一人一人違う。自然よりも利便性を追求し、都市開発を進める人や開発のデメリットばかりに目を向け、自然保全を声高に唱える人、自然保全と僕らの生活を両立させたいと願う人もいるだろう。その多様な考えを活かして、僕らは未来に向けた選択をしなければならぬ。そのためには、議論の場を通して、様々な視点から奄美の自然の価値を再確認し、多様な考えを共有しよう。それが自然遺産の奄美を守ることの第一歩になる。

柔軟に、時には頑固に、「今」が「未来」へ受け継がれた自然遺産の島で、これからも僕は生きてゆく。

「大自然に生きる」

龍郷町立龍南中学校 二年 崎田 乃愛

ーびしゃんー

今日も雨。雨の降る前は、いつもこの匂いがした。雨の匂い。なんて素敵な響きなんだろう。私の住む奄美大島には、たくさん雨が降る。その恵みの、美しい雨が、私達の生命に潤いをもたらしてくれる。私は雨が好きだ。いろんなものが輝いて見えるから。雨上がりの虹がきれいだから。いつも見上げるこの雨空、鳥たちも、今日は飛ぶのを休みらしい。ああ居た、ルリカケスだ。珍しいと言われても、私の住む地域では普通のことなのだ。しょっちゅう見かける。ギヤーギヤー鳴いている。

本当に、鹿児島県本土の方にはいないのだろうか。いつも不思議になる。本当は、本土の方にもいて、だけど隠れてしまっているだけなんじゃないか。そんな事を考えながら、ここにいと、ふわふわして、宙に浮かんでいるような…。

ふと、私は不安になってきた。今まで生きてきた人生、奄美について知らないことばかりではないのだろうか。

これから私は島を出て、島を忘れ、島を知らぬまま、死んでいくのでは無いか。そんな恐ろしいことがあつてはいけな。美しい奄美を守る。それは、私達にしかできないから。この島には、消えかけている灯火がある。それは、そう、

自然だ。生命だ。奄美独自の進化・生態をしている生き物たちが、森、海、空で息を潜めている。

奄美大島の生物の中で、いちばん有名なのはアマミノクロウサギではないだろうか。アマミノクロウサギは、国内希少野生動植物種、国指定天然記念物、絶滅危惧ⅠＢ類、に指定されている。私でも、一、二度見たことがあるくらいである。奄美に住んでいても見ることが難しい貴重な動物が、森の奥には住んでいる。

次に、ハブ。ハブは奄美の森の守り神として、永く、恐れられ、崇められてきた。奄美では、ヘビ等は身近な生き物のため、驚く人は多くない；わけでもない。やっぱり怖いものは怖いから。でも、私は爬虫類が好きなので、ハブは大好きだ。

最後に、ルリカケス。最初に言ったとおり、私の住む地域にはうるさいほどいるのだが、なんと国指定天然記念物だったらしい。ちなみに、ルリカケスは鹿児島県の県鳥でもある。奄美大島には、県鳥もいるんだ。

私は島に生きている。だが、島に生きる私も知らないことがたくさんあった。まだまだ勉強不足だ。美しい奄美を守る、私達にしかできないのに。やっぱり、大人になったら、奄美のことを忘れてしまふのだろうか。本当の奄美は、消えてしまふのだろうか。

否、今からでも遅くない。私は、そう信じている。

奄美大島 徳之島 沖縄島北部及び西表島地域 徳之島町 代表

「住み続けたい徳之島」

徳之島町立亀津中学校 一年 下窪 友彩

キラキラ光る水面にどこまでも広がる青い空。見ているだけで「よしっ。今日もがんばろう。」という気持ちになる私の大好きな登校中の景色。

私は、五年前にこの徳之島に引っ越してきた。引っこしってくる前は徳之島という場所もよく分かっていなかったし、何より住み慣れた町を離れること、仲良しの友達と離れなければならぬことが不安で後ろ向きな気持ちでいっぱいだった。でも、気がつけば徳之島で過ごして五年。今ではたくさんの友達ができそして何よりこの徳之島のが大好きになっていた。登校中に見える海の景色はもちろん、白い砂浜に、小さな魚たちがサンゴ礁の間をゆつたりと泳ぐ透き通った海は、ぜいたくな遊び場だ。店に行けばマンガやドラゴンフルーツなど南国ならではのフルーツも手軽に購入でき冷蔵庫を開けると爽やかな匂いが広がる。そして、朝や夕方などに聞こえる鳥の声。「ヒュールルル。」姿は見えないけれどアカシヨウビンの美しい鳴き声は、自然と心が落ち着く。

しかし、次第に私にとってこの徳之島の自然は当たり前なものになり、特別なものと感じなくなっていた。もちろん、登校中の海の景色も鳥の声も、大好きな場所大好き

なものにかわりはないが、それが「徳之島だからそのもの。」という感覚ではなく私の生活の一部になっていたからだと思う。だから徳之島が奄美大島・沖縄島北部及び西表島とともに世界自然遺産に登録された時も「すごいなあ。」とは思いつつもあまりぴんとこなかった。私にとつての当たり前の風景、当たり前の生活が「守られていくもの。大切に残していくべきもの。」にうまく結びつかなかったのだ。そんな私の考えが大きく変わったのは五月の宿泊学習で世界自然遺産に登録されている剝岳林道の散策に行ったことだ。空をおおうほどの木々に、澄み渡る空気が。林道に入るだけで感じる自然の空気に緊張感を感じた。風に揺れる木々の葉の音。遠くに聞こえる鳥の声。時々ほのかに感じる甘い匂い。目だけでなく耳や鼻、そして体全体で自然を感じることもできた。私たちが歩く両脇には普段はあまり見ることのない板根という板状の根が張りだした木々が力強く立っていた。土の斜面には、何かの生き物の足跡。おそらくアマミノクロウサギが通ったのではないか。動物や虫、植物、微生物もが長い年月、この豊かな自然の中で共に共存して生活してきていることを感じることもできた。ただ美しいだけではなく、すべての生き物があるのままでの姿で、ともに助け合いながら生きていく自然の雄大さを感じ、改めて徳之島の自然のすばらしさを知ることができた。ぜひ、まだ徳之島に足を運んだことがない人にも、この素晴らしい徳之島を知ってもらいたいと思う。

奄美大島 徳之島 沖縄島北部及び西表島地域 天城町 代表

「海と陸、そしてハブと私たち」

天城町立北中学校 三年 高 陽奏

宝石箱のように輝くエメラルドグリーンの海、島を縁取り、海に育てられるように生息しているサンゴ礁。私の住む徳之島は世界に誇れる海に囲まれている。無数にあるこの土地の魅力を、海と陸の視点から紹介したい。

徳之島の一番の魅力は、やはり海だと私は思う。エメラルドグリーンの海が一面に広がり、それは初めて島を訪れる人々の目を釘付けにしてしまう。透明度の高い海でのシユノーケリングは、海中に住む魚たちの世界を思う存分見せてくれ、色鮮やかなサンゴ礁の群生やカクレマノミの観察は時を忘れてしまうほどだ。

また、この透明度の高さは、釣り人にとっても最高の環境だ。日によっては、釣り場から海中を覗くと魚影が見えるのだ。釣り人にとってかなり好都合な釣り場である。しかも、そこで釣った魚を食べるのもまた趣深い。色鮮やかな魚をさばいて口に入れる瞬間は一際自然を感じられ、その独特な皮の色や磯の香りの強い刺身は目や鼻から美味しさをを感じ取ることができる。

ふと気づいて海へ目をやると、いつの間にか風になり、波の音がなくなっていることがある。そんなときは音のない空間に空想をかき立てられ、私はいつの間にか自然の一

部になってしまったのだ。

次は徳之島の陸の魅力について語りたい。ここには多様な動植物が存在し、それらは均衡を保持しながら生息している。かく言う私も地元の山に登り、その恩恵を享受した者の一人だ。山にはハブと呼ばれる毒蛇がいるのだが、それも自然の一部として、いざ散策へ向かうとする。

登山道に入る前から、世界自然遺産の片鱗をうかがわせるかのように、固有種の鳥たちが飛び交っている。登山道へとさしかかる。そこに道はあるのだが、それは動物たちの邪魔をしない、直に自然を感じさせてくれるような道である。

どこからともなく、倒れて腐った木の匂いが漂ってくる。山のあちらこちらからは、飛び遊ぶ鳥たちの鳴き声が聞こえてくる。足下には、いつの日かここにいたであろう動物のフンが落ちている。幸い、この日はハブに遭遇することなく、下山することができた。

世界自然遺産登録されたこの島を含む地域は、昨今動植物の密漁や盗掘に悩まされている。しかしながら、もしここにハブがいなければ、人々是我先にと山を荒らし、さらなる被害があつたかもしれない。そう考えると、ハブは人間から生態系を守っているのだと思えてきた。今まで、ハブは私たちにとって危険な存在という認識でしかなかったが、これからはこの島の自然を共に守っていく同志として、うまく共存していきたいと願っている。この豊かな海と陸のために。

奄美大島 徳之島 沖縄島北部及び西表島地域 東村 代表

「僕たちの誇り」

東村立東中学校 二年 北島 天人丸

僕は沖縄の東村、「ヤンバル（山原）」という亜熱帯の森が広がる美しい自然の中で暮らしています。ここはその自然の豊かさが認められ、世界自然遺産にも登録されている場所です。僕はその自然の恩恵を受けながら毎日を過ごしています。

ですから、僕が住んでいるこの場所の魅力を語るなら、この豊かな自然のことを一番に上げます。これらは、東村に暮らしていればいつでも感じられるものです。豊かな自然が、季節や時間、天候によつて様々な変化を見せながら、いつでも僕たちを魅了してくれます。

例えば、僕は毎日走ることを日課にしています。早朝、森沿いを走っていると、目を覚ましてきた様々な鳥の音が聞こえてきます。ノグチゲラ（啄木鳥）が木をつつく姿を見かけることもあります。そういった自然の声を聞く楽しみもあるので、僕は毎朝走ることができています。

一方、ここ沖縄は年間を通して温暖な気候であるため、木々の季節ごとの変化は、内地と比べて分かりにくいですが、でも毎日を自然の中で過ごしていると、その小さな変化に気づくこともできます。落ちる葉、芽吹く草花、色づき実った木の実など、それらの変化に気づくことで、季節が変

わってゆくことを実感できます。

森だけではなく豊かな森が育てた豊かな海も魅力です。もし「一番遊んだ場所は？」と聞かれれば、真先に答える場所は海です。僕の家の前には広い海と白い砂浜が広がっています。小さな頃は毎日のように海に行き、暗くなるまで泳いだり、貝をとったりして遊んでいました。学校の窓からも青や碧に輝く海がよく見えます。小学生の頃は給食時間に皆で机を移動させ、海を眺めながら食べることもありました。僕らはここ東村で、豊かな森や海を身近に感じながら暮らしています。それはすごく幸なことだと思います。

ただ最近はこの自然豊かな海に、多くの海洋ゴミが漂着しています。外国の言葉で書かれたペットボトルやプラスチックのゴミが毎日たくさん流れ着きます。みんなで片付けることもありますが、とても追いつかない・・・と感じることも多くなっています。悲しいことだと思います。僕が暮らしているこの場所には、自然が生み出す誇れる魅力や多くの楽しみがあります。心からそう感じています。そう感じるからこそ、僕だけの誇りではなく、ここに住む村民だけの誇りでもなく、世界中の人々の誇りでもあつてほしいと願っています。もちろん願うだけでは変わらないことは分かっています。だからこそその願いが現実になっていくよう、僕は努力します。僕はこの魅力を多くの人に伝えていける人になります。多くの人と話をし、深く学んできます。

参考： 子ども作文コンクール 概要

1. 趣旨・目的

世界自然遺産5地域会議（以下「5地域会議」という。）では、大阪・関西万博に参加するに当たり、以下の趣旨・目的で「子ども作文コンクール」を実施しました。

- ・5地域会議構成団体である23市町村に暮らす子供たち（小学生と中学生）に、作文を通じて大阪・関西万博に参加してもらう機会として作文コンクールを行い、選ばれた5地域（知床、白神山地、小笠原諸島、屋久島、奄美・沖縄）の代表を万博会場に招待して作品を発表する。
- ・地域の将来を担う世代が参加することにより、地域の自然や自然と共にある暮らしの価値を万博というイベントを通じて気づくまたは理解する機会とする、また、大人が思いがけないような新たな視点の提起、といった効果が期待される。
- ・5地域会議を構成する市町村が募集・選考にたずさわって作品募集・コンクールという形式をとることにより、万博へ向けての地域ぐるみの参加・盛り上がりが期待でき、子供が来ることにより保護者の万博参加なども期待できる。

2. 作文テーマ

作文を募集するにあたって、5地域会議が万博参加する意義に合わせて、次のテーマを設けました。

「世界自然遺産と私たち—みつけた！自然のふしぎ・自然と暮らすたのしみ」

具体的には、地元の自慢の景色、自然の中での遊び、自然の中で感動したこと、不思議だなと思ったこと、暮らしの中で自然があるからこそ感じられる音やにのびのびした体験、などについての作文を募集しました。

3. 部門の設定

子供たちの成長や教育課程による文章力の違いから、「小学生の部」「中学生の部」の2つの部門に分けて、それぞれ作文を募集することにしました。

4. 最優秀作品の選考

応募された作文より、各部門別に、5地域会議各市町村の代表作品1作品、そして、それらの中から世界自然遺産5地域をそれぞれ代表する作品1作品を最優秀作品として選考しました。

5. 選考方法

統一的な要項の下、各市町村の募集により応募された作品の中から市町村が一次選考を行い、市町村代表候補作品を選出しました。選考方法は各市町村が決定しました。

5地域会議が設置した選考委員会では、その候補作品の中から、各市町村の代表1作品を選出しました。次に、5地域それぞれの代表1作品を、各地域内の市町村代表作品の中から、選出しました（小笠原、屋久島は、各町村代表が地域代表）。

6. 選考基準

選考に当たっては、次の通り選考基準を設けました。

- ①作者独自の視点による観察力、想像力、展開力、感性などが読み取れる。
- ②地域ならではの自然や文化とのふれあいや関わりが描写されている。
- ③自然との関わり方などを通じ、社会や生活、環境への思いや考えが読み取れる。

代表作品は①～③のいずれをも満たしていることが望まれるが、基準のどこに力点を置き選考されるかは、作品内容によって選考委員の判断としています。

7. 選考委員会

選考委員会は、5地域会議から委嘱した次の三名で構成しました。

- ①山極壽一氏：総合地球環境学研究所所長 京都大学名誉教授
（5地域会議の趣旨に賛同、今回の万博参加企画全般に関わっていただき、催事当日同会場で行う、国際シンポジウムのコーディネーターを務める）
- ②岡部 史氏：児童文学作家、翻訳家、歌人（塔短歌会所属）
- ③川上和人氏：森林総合研究所北海道支所地域研究監、鳥類学者、NHK ラジオ子ども科学電話相談回答者
（催事当日、別のプログラムで小笠原諸島地域の紹介のため登壇）

8. 選考日程

作品募集から選考終了、選考結果発表までは次の日程で実施されました。

- 12月～2月：作文募集（市町村ごとに募集）
2月～3月：一次選考（市町村代表候補作品決定）
3月～4月：最終選考（選考委員会にて市町村代表作品、地域代表作品決定）
6月5日：大阪・関西万博 シャインハット（EXPO ホール）にて発表・授賞式

9. 作品発表・授賞式

催事名：千の自然・千の時間—私たちと世界自然遺産5地域

日本の世界自然遺産5地域に暮らす子ども作文コンクール

日 時：令和7年6月5日（木） 11時～12時

会 場：大阪・関西万博 EXPO ホール「シャインハット」

主 催：世界自然遺産5地域会議

共 催：イベント学会、一般財団法人地球産業文化研究所

後 援：環境省、林野庁

10. 入賞作品の掲載等

本作品集に掲載するほか、世界自然遺産5地域会議ホームページに掲載します。

<https://www.yakushima.or.jp/heritage/>

世界自然遺産5 地域会議「子ども作文コンクール」入選作品集

発行年月：2025 年 6 月 5 日

制作：「子ども作文コンクール」選考委員会

問合せ先：世界自然遺産5 地域会議事務局

<https://www.yakushima.or.jp/heritage/>

（公財）屋久島環境文化財団 TEL0997-42-2900

（株）メッツ研究所 TEL03-5227-7802

世界自然遺産5地域会議「子ども作文コンクール」入選作品集

主催：世界自然遺産5地域会議 後援：環境省 林野庁

<https://www.yakushima.or.jp/heritage/>

制作：世界自然遺産5地域会議「子ども作文コンクール」選考委員会